

## 日はまた昇る

河 田 聡

(大阪大学大学院・理化学研究所)

東大生研がなくなった六本木の街に、新しいゾーンがオープンした。オフィスとレジデンスとアカデミアとショッप्ス、庭園、あれやこれやを含みながらも調和のとれた魅力的な都市である。数百名の地権者を交えて17年もの歳月をかけた民間企業の都市再開発事業である。行政が関わらなかったからこそ明確なコンセプトの街づくりができた。

そのメイン・タワーの展望台で、世界都市展をやっている。東京の街の緻密な縮小模型（とはいっても大きな部屋を占めている）が立体的に作られており、別の部屋には同じ縮尺で上海やニューヨーク・マンハッタンの街がある。模型の東京は圧倒的に広大であり迫力があるが、他の都市と比べてまるで美しさが無い。建物があまりに細かく小さく、ばらばらだからであろう。東京はペンシルビルの街である。

日本人はペンシルビルが好きなのだろうか。そういえば、日本の学会も細かく小さく分かれてペンシルビルの街のよう。サイエンスとテクノロジーが世界規模で大きなうねりで進化しているのに、小さなコミュニティーに閉じこもる学会は、再開発に応じないペンシルビルに似て見える。生まれ育った街を社会に還元した六本木の地権者たちの英断が、学会にも欲しい。

同じころ完成した品川や汐留の再開発地区は、建物は大きくて立派だが、街のコンセプトがみえない。この2地区は適当にテリトリーを配分して、後はそれぞれが勝手にビルを建てたのだろう。学会内の研究グループも幹事推薦方式も、一度設定されると、既得権ができてしまうようだ。六本木ヒルズは、住宅タワーも含めて賃貸が中心であり、分譲による既得権が発生しないように工夫されていると聞く。

新しい六本木の街の集客力は、予想をはるかに超えているそうだ。幅広い世代の人が集まるが、特に若者に魅力があるのだろう。逆に、若者に魅力のない街は減っていく。

最近の「光学」誌に、学会の将来を支える若手・中堅の会員たちによる現在の学会運営に対する意見書が出ていた。光学会も再開発して、若者の気持ちのわかる学会になってほしいと願う。学問とはいつも若者が先導し、過去の栄光と権威と伝統を否定していくことによって進化するものである。地動説を唱えたガリレオ・ガリレイは、教皇庁によって異端とされ幽閉の身となったが、歴史は彼に正義を与えた。

展望ラウンジから見える深夜の六本木通りには、赤と黄色の点列が連なって流れていく。いつも見上げていた東京タワーが、眼下で電飾を瞬かせる。今度は、夜明けの東京をここに見に来よう。光学会にもまた、日が昇る。